

# 〈クリティカル・シンキング文献紹介〉

**M. Neil Browne & Stuart Keeley, *Asking the Right Questions — A Guide to Critical Thinking*, Prentice Hall, sixth edition, 2001, 221 pages.**

本書は初版が発行されて以来、すでに6版を数え、大学でも用いられているポピュラーなクリティカル・シンキングの教科書である。

本書において著者たちはいかにして議論を評価するかという点に焦点をあてている。彼らはクリティカル・シンキングを「互いに関連のある一連のクリティカルな質問を自覚し、加えて適切な機会にこの質問を問う、あるいはこの質問に答える能力と意志とを持つこと」と定義している。このことによって他人の議論を鵜呑みにせず、疑問に付すべき部分と信頼に足る部分を区別することができるようになる、と彼らは考える。

ここでいう「クリティカルな質問」が、'the right questions'として、2章から13章までの各章で一つずつ挙げられていく。彼らが挙げる'the critical / right questions'とは以下の通りである。

- 1.問題と結論が何か？
- 2.根拠は何か？
- 3.どの語句が曖昧か？
- 4.どんな価値の対立があり、どんな価値が想定されているか？
- 5.どんな事実が想定されているか？
- 6.推論に誤りはあるか？
- 7.証拠はどれだけ信頼に足るか？
- 8.他の競合する原因はあるか？
- 9.統計にごまかしはあるか？
- 10.重要な情報の何が省かれているか？
- 11.どんな合理的な結論が可能か？

各章では、なぜその質問が重要であるのか、どのような機会にその質問を問うべきか、

どのようにしてその質問に対する答えを導き出していくのか、その質問を問う際には何に注意すべきか、などが示される。常にこれらの質問を問う準備をしておき、適切な機会に適切な質問を問うことができれば、ある議論における主題、結論、理由、主張の背景にある価値観、明示的に述べられていない想定などを同定し、それらが説得力のあるものか、あるいは推論が妥当であるかを決定することができる、そしてそれがクリティカルに考えるということだ、と著者たちは主張している。

クリティカル・シンキングの定義にしても、'the right questions'にしても、この本では、なぜ彼らがこのような形のものを採用するに至ったか、という議論には立ち入っていない。クリティカル・シンキングの他の可能な定義、あるいは他の可能な'reight questions'があるのではないだろうか、ということには言及しない。その代わりに彼らは彼らの勧める方法を習得すれば、実際に議論において役に立つということを示す。

本書のもう一つの特徴として、相手の議論をより良く理解し、それによって自分の取るべき立場を決定する役に立てる、という点が強調されていることが挙げられるだろう。本書では議論の評価に焦点が当てられているということは既に述べたが、著者たちがここで念頭においている議論というのは、主に社会問題など実際的な問題に関わる議論であるように思われる。したがってその際に、相手の立場や、議論の背景となっている想定・価値観などを考慮に入れながら、まずは相手の議論を正しく理解することが勧められる。社会問題などについて討論においては、ともすれば相手を説得する、あるいは相手に論駁する技術が重視されがちであるが、著者たちは軽々しく相手の主張を斥けることに対しては所々で警告を与えている。クリティカルな質問の意義は、「相手の議論をより深く理解し、評価するために相手の助けが必要なのだ」ということを表明することにあると著者たちは言い、クリティカル・シンキングのインタラクティブな側面を強調する。

(久木田 水生)

**William Hughes, *Critical Thinking: An Introduction to the Basic Skills*, Broadview Press, Third edition, 2000, 360 pages.**

本書は「序論」「意味」「議論の評価」「応用」の四部と「付録」とから成る。「序論」においては、クリティカル・シンキングの技術として、議論を解釈する技術、前提を検証する技術、推論を評価する技術の三つを挙げ、本書の関心が、そうした技術の理論的基礎（たとえば従来の「論理学」）にではなく、その技術の実際の適用にある、とする。「意味」の部においては、議論を解釈する技術を扱い、言葉の意味を明晰にする方法、および、前提と結論をあきらかにして議論を再構成する方法を解説する。つづく「議論の評価」の部に

においては、前提を検証する技術と、推論を評価する技術とを扱う。そこでは、議論における各種の誤謬を挙げる伝統的な「誤謬アプローチ」が議論のネガティブな批判に終始してしまう点を指摘し、われわれが創造的に議論を展開していくための技術を研ぐために、良い議論が満足すべき基準を確立する「基準アプローチ」をとる、とする。このアプローチから、前提の正しさの評価、前提と結論との関連性の評価、および、前提による結論のサポートの充分性の評価に関し、その方法を解説する。「応用」の部においては、反論の仕方と、合理的でない説得のテクニックを紹介した後、実際にエッセイを批判したり執筆したりすることへと読者を導いていく。練習問題が多く用意され、英語も論理的で非常に読みやすい。2000年に出版された第三版ではメディア批判の章が付け加えられ、実用性が強められた。本書は、技術の習得という実用的側面を重視するという意味で、クリティカル・シンキングのオーソドックスな教科書であると言えるであろう。

しかし、この教科書の特徴は何といっても、理論的基礎には重点を置かないと断っているにもかかわらず、その実、クリティカル・シンキングの理論的基礎として哲学的理論を豊富に紹介している点にある。「意味」の部においては、言語の意味とは何かという言語哲学の問いを提出し、指示説・観念説・使用説を紹介する。また、そこでは、記述的・評価的・情動的意味といった区別も導入する。「議論の評価」の部において、前提の真理性を評価する方法を扱う際には、対応説・整合説・プラグマティズムといった哲学的真理論を紹介する。また、前提による結論のサポートの充分性を評価する方法を説明する際には、通常扱われる演繹的推論と帰納的推論に加えて、倫理的事柄に関する道徳的推論を取り上げる。「付録」においては、「うそつきパラドクス」や「囚人のジレンマ」といった、哲学や倫理学の分野でしばしば議論されるパラドクスやパズルを紹介する。クリティカル・シンキングが哲学と切っても切れぬ縁にあることを教えてくれる好著であり、クリティカル・シンキングを、哲学入門を兼ねて、あるいは、哲学の側面から、学びたい・教えたいと考える際には是非とも参考にすべき教科書である。著者の William Hughes が倫理学・社会哲学・政治哲学に造詣が深いことも付け加えておきたい。

(久米 暁)

**Alec Fisher, *Critical Thinking — An Introduction*, Cambridge University Press, 2001, 249 pages.**

本書は、学生にクリティカル・シンキングの技術を身に付ける訓練をさせることを主たる目的として書かれた標準的な教科書である。

著者は序文においてクリティカル・シンキングがこれまでにどのように定義されてきた

かということを考察し、読者にクリティカル・シンキングの概念を与えることから始めている。本書自身が明示的に定義を与えている訳ではないが、著者は様々な定義を要約して次のように述べる。

「クリティカル・シンキングには、観察やコミュニケーション、その他の情報のソースについての解釈や評価をすることが、明らかに必要である。また想定されていることについて考えること、当を得た質問を問うこと、含意されるものを導き出すこと——つまりある話題について推論したり議論したりすること——も必要である。さらに、クリティカルに考える人とは、何を信じるべきか、何をなすべきかということを決定する最良の方法が、このような推論されたそして反省的な考え方を採用することであるような状況が多々あるということを信じ、従って、これらの方法が適切な場合においては、いつでもそれらを使おうとする人である。」

著者によれば、クリティカル・シンキングは技術であり、従って巧拙もあれば、訓練によって修得され得る、されるべきものである。また、この技術は従来はそれぞれの学問分野に研究を通じて間接的に修得されてきたものであるが、本書ではそれを直接的に修得させることを目的としている。著者はこの修得の過程を、スポーツなどの技術を修得する過程と同様のものと捉え、正しい技術を使うことが実際の場面でどのように有効であるかを実感させながら身に付けさせることが重要であるという。そのため各章にその章で身に付けるべく意図された技術に使うのに適した例題が挙げられ、実際にそこで教えられた技術を使って例題を解釈・評価することが読者には課される。また巻末にも多くの例題が収録されている。また解答もつけられているので、独習者にも適している。

本書では特に議論の解釈（理解）や評価の仕方が中心的に論じられる。著者は以下の技術を基礎的な技術としてあげている。

- ・ 推論されている事例における要素、とりわけ理由と結論を同定する。
- ・ 想定 *assumption* を同定し、評価する。
- ・ 表現やアイディアを明確にし、解釈する。
- ・ 主張されていることが受け入れられるかどうか、とりわけ信じられるかどうかを判断する。
- ・ 異なる様々な議論 *argument* を評価する。
- ・ 説明を分析し、評価し、作りだす。
- ・ 決定を分析し、評価し、下す。
- ・ 推論する。

- ・議論を作り出す。

このように著者は、議論のタイプの分類、それぞれのタイプの特徴、それぞれのタイプに応じた解釈や評価の仕方、議論における根拠と結論の同定の仕方、推論やソースの信頼性の判定の仕方など、説得力のある議論の作り方などかなり細かい事柄を、具体的な例を挙げながら論じている。本書において著者は主にアカデミックな議論を想定しているように思われるが、論理や言語に関する事柄や、形式的な構造の理解という側面についても比較的詳しく語られているのもそのためだろうか。

(久木田 水生)

**Richard Paul and Linda Elder, *Critical Thinking: Tools for Taking Charge of your Learning and Your Life*, Prentice Hall, First edition, 2001.428 pages.**

著者達は世界中の大学等でワークショップを開いてきた国際「クリティカル・シンキング(CT)」運動の著名な指導者である。本書はワークブックのような性格を持ち、想定している読者は、主に大学生だと思われる。著者達によれば、鋭く、内にこもらない、分析的な心を養わねばならず、そのために用いられる道具類は人間らしく生きるための助けにもなりうる。そして本書の内容は、公平さ、知的謙遜及び知的誠実を獲得するための説明と具体的な実践的方法の提示となる。著者達の主張をもう少し詳しく紹介すると以下のようになる。

思考における卓越性は、単なる思考力の優秀性にのみ懸かっているのではなく、知的な、誠実、謙遜、公正さの感覚、忍耐力、公平さ、理性への信頼、勇気、共感、自律性、といった諸徳を欠くべからざるものとしている。

ところで、自己中心的な思考は、一見合理的に思われることもあるが、非生産的に感情に支配され、視野が狭く、柔軟性を欠き、支配欲と自己卑下に巻き込まれる、我々の自動的な傾向性であり、我々がよく思考することに対する大きな障害となっている。人間の心には、感情、欲求、思考の機能を持つが、それらはそのままでは自己中心的であり、そこからの脱却は思考の制御によってのみ可能である。また同時に人間は党派性等の否定的な意味での社会中心的な傾向性も持っている。しかし自己ないし社会中心主義は、道徳的ではない。正しい道徳的推論のためには、道徳的な概念及び原理を明晰に表現し、それらの個々の状況への適切な適用を学ばなければならない。

これらの悪徳を避け、上の美德を獲得するためには、以下のことを常日頃心掛けることが肝要である。すなわち、思考は常に以下の8つの観点から分析されなければならない。

1.何が自分の最も基礎的な目的であるか、2自分はそもそもいかなる問いに答えようとしているのか、3.その問題を解くためにはどういう情報が必要か、4.その問題におけるもっとも基本的な概念は何か、5.考える上で自分は何を前提としているか、6.自分はいかなる視点に立っているか、7.自分のもっとも基礎的な推論ないし結論は何か、8.自分の結論の含意は何か。

そしてさらにこれらの分析は、1.不明瞭な点はないか、2.十分詳しいか、3.使用している情報は正確か、4.無関係ではないか、5.論理構造はどうなっているか、6.他の観点への目配りは十分か、7.表面的ではないか、8.正当化可能か、という8つの観点から絶えず吟味され質を高められなければならない。

このような分析の具体例が、特に本書の読者である大学生のために、さまざまな学問分野等について多数示され、また読者が自分で取り組むべき具体的な課題や実行すべき決まりが与えられているが、筆者達によればCTは一朝一夕に身につくものではなく、スポーツや楽器の演奏と同じで規則正しい練習を毎日何年にも亘って続けることで初めてマスターできる。そうすればCTを血肉化し、相当高いレベルに至ることができる。ただし、人間は不当な一般化を犯しがちだが、ある特定の分野の現在の知見の絶対視は許されず、一般に人間の知識は限られたものに過ぎないことを肝に銘じ、過信を慎むべきであるとされる。

この他本書では、問題解決を自動化する単純な方法は無いこと、また、問いの立て方の優劣は思考に重大な違いをもたらすのであり、探査的、分析的、総合的、創造的で、結合を形成するような問いを立てなければならないということ、そして、決定を下すときは、それを孤立したものとしてではなく、自分の人生全体との関連の中で捉えなければならない、といったことも主張されている。

最後に本書の特徴を3つ指摘しておく。第一に本書は、冒頭で言及した活動の他ホームページを開設するなどしている団体の印刷物であり、日常言語の論理やレトリック等を扱う今回選ばれた他書と比べても、その非学術的体裁において際立っている。それゆえ第二に、本書は情報や分析を提示するだけではなく、バスケットボールやクラリネット等の教則本と同様に、規則正しく毎日何年も続けられるべき具体的な実践を読者に課してくる。第三に、よく考えることと道徳との関連付けは、本書の大きな特長だと思われる。著者達は、道徳的であるためにはよく考えることが不可欠であり、また、よく考えるためには道徳的な徳性を身につけることが必要だ、と主張している。

(三原 就平)

**Antony Flew, *How to think straight*, Prometheus Books, 1998, 164 pages.**

本書は、長年に渡って活躍を続けてきた哲学者 Flew による、いかにして実践的な推論・思考をするかについての解説書である。

第一章では、肯定否定がなされる命題・それによって構成される議論・命題や議論が持つ意味内容・矛盾や誤謬の問題といった、推論するにあたっての基礎となる概念について説明される。

第二章では、主に仮言命題と全称命題が扱われる。仮言命題については、その中で有効な形式のものと無効なもののが挙げられる。次いで、全称肯定命題と全称否定命題に論述が及ぶ。

第三章では、歪曲された議論が吟味され、そういった事柄が避けられるべき旨が述べられる。例えば、必然的命題と偶然的命題の混同などに注意が促されている。

第四章では、議論を進めるにあたっての動機と、拠って立つべき立場に触れられる。主題・動機を変えることによって起こる議論のズレや不整合に考察が及んでいる。

第五章では、我々の言語を使用した記述のあいまいさや、それに基づく誤謬の問題が検討される。ある記述がその意義を確定出来るほど十分に規定されていないような場合が挙げられている。

第六章では、数量を用いたデータが取り上げられ、それが一面的な誤解を生む可能性もあるので、慎重に扱われねばならない旨が述べられる。

第七章では、「誤り(error)」について論じられる。知らず知らずに「誤り」がおかされ、それが積み重なるということに注意が促される。

第八章では、以上の事柄が概括的にまとめられ、合理的に考えることの意義が改めて強調される。誤りを犯すことは人間の常ではあるが、その中で出来るだけの努力が望まれることが述べられる。

Flew は膨大な知識を駆使して、哲学に留まらない種々雑多な引用を用いつつ、議論の有り方を分析している。西洋の哲学的著作以外からの引用は、例えば毛沢東の『矛盾論』であったり（第一章）、W.B.イェーツの詩であったり（第五章）、おなじみルイス＝キャロルのアリスであったり（第七章）する。その上で、好ましいと思われる議論を模索し、また読者にさせようと試みているのである。また、古典的文献のみならず、歴史的な事実や20世紀の同時代的な出来事なども話題にあがっている。例えば、ネルソン提督のトラファルガー海戦前の有名な号令であるとか（第五章）、マーガレット＝サッチャーの不況や失業者問題への取り組み（第六章）などであり、引き合いに出される具体例は極めて豊富であると言える。

我が国では、長らく議論や推論の進め方そのものの方法論や、適切な思考に従った上での論述の仕方についての書物が少なかった傾向があったように思われる。勿論、近年は、レポートや論文の作成法についての良書が数多く出版されていることも事実である。それでも、例えば U.エーコの『論文作法』などは、文字通り論文の作成方法に焦点が絞られているので、そういった局限化された実際的な必要性を少し離れたところで思考方法そのものを問うような書物ではないように思われる。そうした事情からも、本書は学生にとって一助となるものであろう。ただし、著者が英国の年配の名誉教授であるからか、学生用の教科書としてはやや読みにくい英語であるようにも思える。また、具体例が豊富である分、かえってその議論や分類が体系的になっていない印象もある。

(枝村 祥平)

**Anthony Weston, *Rulebook for Arguments*, Hackett Publishing Company, Third edition, 2000, 87pages.**

環境倫理学において注目すべき研究者の一人である Weston による critical thinking の概説書である。14cm×22cm で87ページという小さな本で、説明も明快なので、読み通すのはそう難しくはない。通常の教科書ならば当然期待されるような練習問題の類はまったくないし、真理論や意味論など純理論的な話もなく、議論を構築したり評価したりする場合にすぐに役立つような事柄にしぼってわかりやすい説明が行なわれている。そのため、本腰をいれて critical thinking 勉強しようという読者には物足りなく感じられるかもしれないが、そもそも著者がこの本でねらっているのは、critical thinking の本の山にさらに同類のものを付け加えることではなく、タイトルの「ルールブック」という語が示唆しているように、議論を行ったり評価したりする際に簡便に参照できるような、基本的な注意事項の列挙である。その意図は、序文において以下のように明確に述べられている。

「この本は議論を書き評価する技術の手短な入門である。内容はごく基本的なものにしぼっている。学生や著述家が必要としているのが、そうした注意書きやルールの一覧にすぎず、長い入門的説明ではないことが多いのに私は気づいた。そこで、論文執筆や「非形式的論理学」についてのおおかたの教科書とは違って、この本は、個別のルールを中心にして構成されており、それらのルールは、健全ではあるがとりわけ手短かに例示され説明される。つまり、教科書ではなくルールブックなのだ。

教師もしばしば、そうしたルールブックを与えること、つまり学生が自力で参照し理解できるので、わざわざ授業で取り扱う必要がないようなやり方を望んでいるのも分かった。繰り返すが、短いことが重要なのだが——要するに、学生が、論文を書いたり、議論を評価したりする助けとならなければならないのだ——、ルールを述べるに当たっては、教師が、各学生の論文の余白に完全な説明を書き込むのではなく、ルール 6 とかルール 16 とかを参照させるだけ

で充分であるような説明でなければならない。短いがそれだけで十分なもの——これが私のなぞろうとしてきた下図である。

このルールブックは、はっきりと議論そのものを取り上げる授業でも使うことができる。その場合には練習問題や、もっと多くの例題を補う必要があるが、そうした練習問題や例題を満載しているテキストや、ほとんどそればかりというテキストで利用できるものはすでにたくさんある。けれどもそれらのテキストにも補うべきものがある——このルールブックで提示されているもの、つまり良い議論をまとめるための単純なルールを補う必要がある。選ばれた誤謬を論破する（あるいは少なくともそれにねらいを定める）やり方だけを知って「非形式的論理学」のコースを修了する学生があまりにも多すぎる。現実には何が悪いのかを学生が説明できない、あるいは自分自身の議論に着手することができないことがあまりにも多すぎる。非形式的論理学はもっとうまくやるかもしれない。この本は、やり方を提案するひとつの試みである。」  
(p. ix-x)

このような意図の下に、個々のルールを簡潔な形で示し（たとえば、ルール1「前提と結論を区別せよ」、ルール2「自然な順序で自分の考えを提示せよ」など）、それについて短文を例として挙げるなどして、説明を行っている。その説明も、長いものでも4ページ程度のものであり、目次を見て当面の問題に関連するルールの項目を読めば、とりあえず必要な事柄が理解できるようになっている。もちろん、まず一通り通読した上で利用するのが望ましいし、挙げてある例も現実的な、読者の興味を引くようなものが選ばれ、個々の説明に際しては難しい術語の使用は慎重に避けられているので（もちろん、「肯定式」などの術語も出てくるが、それについて説明している箇所以外には術語を用いて説明するのはごくわずかである）、読み通すのに困難はないだろう。

次に、本書の内容が概観しておこう。この本は序章および10章（および定義を扱った補遺）からなり、1章から6章までは短い議論について述べられ、7章以降では、それに基づいて論文を書く場合の注意事項、アドバイスが述べられる。序章において「議論すること(arguing)」および「論文(argumentative essays)」とはどのようなものかが簡単に説明され、「理由や証拠を示すことによってある見解を擁護する」ということがポイントとされる。そして、以下1章から6章では、それぞれのルールに通し番号がふられていて、全部で30のルールが示されている。1章では、「信頼できる前提から始めよ」(ルール3)や「含みのある言葉(loaded language)は避けよ」(ルール5)といった、議論における一般的なルールが示される(ルール1-7)。その上で、2章から6章では議論のタイプごとにルールが提示される。第2章は「例示を用いた議論」に関してで、「背景となる知識が重要である」(ルール10)などのルールが示される(ルール8-11)。広い意味での「帰納的推論」ということになるだろうが、「帰納(induction)」という術語は本書では用いられていない。第3章は「類比を用いた議論」に関するもので、これはルール8の例外であるとした上で、「類

比は当該の問題に関連した点で類似した事例を必要とする」(ルール12) というルールだけが示され、ヒュームによる、世界の創造者の存在についての議論に対する批判が紹介されている。第4章は「権威に基づく議論」に関するもので、「情報源の出所を明らかにしなければならない」(ルール13) などのルールが示されている(ルール13-17)。第5章は「原因に関する議論」に関するもので、「原因がどのようにして結果をもたらすかを説明する」(ルール18) などのルールが示されている(ルール18-23)。6章では、「肯定式」「否定式」など演繹規則の7つのタイプが示されて、そのそれぞれについて番号(ルール24-30) がふられている。6章の最後の節では以上のような議論のタイプが複合的に用いられた例として、コナン・ドイル『四つの署名』の導入部分に見られる、シャーロック・ホームズの推理の過程<sup>1</sup>が、これまで述べてきたルールと関連づけながら、各命題に分割・整理して説明される。

後半の7章から9章は具体的に論文を書く場合の注意点、アドバイスで、この場合には、各章ごとにルールの番号がふられている。まず第7章では「問題を探ること(Exploring the Issue)」についてで、「当の問題のあらゆる側面について議論を探れ」(ルール A1) など、論文を書き始める前に問題そのものについて検討を加える際の注意事項が3つのルールとして示されている(A1-A3)。第8章は「論文の主要な論点(Main Points of the Essay)」についてで、「大きな反古紙と鉛筆を取り出し、論文のアウトラインを準備し始める」いわば論文の草稿段階での注意事項として、「(自分の見解に対する) 反論を考慮する」(ルール B4) などの5つのルールが示される(B1-B5)。第9章では「書くこと(Writing)」についてで、実際に論文を書く際の注意事項として、「議論を一度にひとつずつ行う」(ルール C3) など6つのルールが示される(C1-C6)。第10章は、補足的な注意点を挙げたもので、議論において犯されることの多い誤謬のパターンについて、2つの一般的な誤謬(不完全な証拠からの一般化、他の可能性を見落とすこと)が説明された後で、「対人論法(ad hominem)」など古典的な誤謬のタイプがアルファベット順に取り上げられ、簡単な説明が加えられている。補遺では定義について3つのルールが挙げられて、たとえば「用語について論争がある場合には、はっきりしたケースから始めること」(D2) といったルールが3つ示されている(D1-D3)。

この本で述べられていることは、ある意味で、倫理的問題に対する Weston のアプロー

---

<sup>1</sup> ホームズはワトソンに対して、観察と推理の違いを説明する実例として、ワトソンが「ウィグモア街郵便局へ行って来たこと」、そして「そこで電報を打ったということ」を言い当ててみせる。

チの要点を、より一般的な形で述べたものと言うことができる。*Toward Better Problems* (Temple University Press, 1992)において彼は、「何らかの倫理理論を実地に体系的に適用する」というアプローチや、問題を、たとえば中絶論争における「プロ-ライフ（生命擁護派）」対「プロ-チョイス（女性の選択権擁護派）」というような妥協の余地のない価値観の対立として定式化して論じるようなアプローチをしりぞけ、自らが採用する戦略の要点として次の二つを挙げている。まず、「問題をより複雑で多面的な仕方で(in a more complex and multi-sided way)見ること」が重要であり、当該の問題そのものをもっと扱いやすいものへと変換する可能性を切り開くことが試みられなければならない。第2に、複雑で相対立している価値のまとまりについて、それらを単純化することなくその力動(dynamics)を明確にし、あまり明確でない価値を、全体の中でそれが占めている位置に敬意を払いつつ、よりよく再調整するやり方を提案する試みがとられるべきであるとする。このようなアプローチの仕方が、この *Rulebook* で示されている議論のルール具体的な適用であることは明らかであろう。倫理学にとっての critical thinking の重要性については、Weston の *A 21st Century Ethical Toolbox* (Oxford, 2001)という本でより明瞭に示されている。こちらは *Rulebook* よりも大きいサイズで406ページの本格的な教科書といってよいものである。この書の第3章(pp.135-176)では「倫理学におけるクリティカル・シンキングのための道具(Tools for Critical Thinking in Ethics)」というタイトルのもとで、*Rulebook* で取り上げられたルールを倫理的議論の文脈の中でどのように活用すべきかが詳しく示されている。興味のある方はこちらも読まれるとよいだろう（より簡便なものとしては、*A Practical Companion to Ethics* (2nd. ed. Oxford, 2001)もある）。

(濱岡 剛 中央大学経済学部・助教授)

**Nicholas Capaldi, *The Art of Deception: An Introduction to Critical Thinking*, Prometheus Books, 1987, 222 pages.**

この本の目的は、クリティカル・シンキング(以下 CT)の背後にある原理を単純で明晰な仕方の説明することである。つまり、議論の理想的な構造がどのようなものか、その理想がどのようにしてCTのパラダイムになるか、また、議論が理想的な構造の実例とならない場合はどういう場合か、等を扱う。CTの背後にある構造を意識すれば、より読解力がつき、議論の論理を明らかにし、うまく反論することができるようになる」と著者は言う。

CTは①論理的思考②日常生活で出会う議論への対応、の二つに分けられる。①については、専門用語は最小に、日常生活に必要な論理の部分だけが、誤りが生じる実際の文脈に力点をおいて簡潔に説明される。筆者の力点は②にあり、分量的にも大部分を占める。

この本の最大の特徴は、②の部分で、「他者を欺いたり騙したり操作したりしたい人の観点から」記述していることである。筆者によれば、通常の非形式論理のコースや教科書は（明らかで単純な）誤りの同定を練習するが、これは受動的な認識にすぎず、能動的な操作を練習する方が有効であるという。そして、騙す技術をマスターすれば、論理の誤用や悪用を見抜くことができるという。

論理は議論 argument（＝前提＋結論）の研究であり、前提と結論の同定のルールが示される。妥当性と健全性の説明がなされ、非形式論理学の伝統的な誤謬は、非健全な議論（妥当だが受け入れられない前提のある議論）と整理される。

この健全でない議論（誤謬）をいかに巧く使うか、言い換えれば他人をいかに巧く騙すかの手法の説明が、この本の大部分を使って詳細に説明される。まず「主張を行う」presenting your case 際には、主張、問題、観点についての明晰な観念を持つこと、他の問題についての立場との関係を意識すること、主張の相手をはっきり知ること、主張の手段を理解すること、主張の目的を常に忘れないこと、といった一般的注意の後で、聴衆の共感を得るための方法が示される。聴衆と共通の準拠に訴える方法、聴衆の感情に訴える方法（感情的な言葉を使わず、単純な事実のみを提示する）、権威に訴える方法、すべての人が支持する理想や原理に訴える方法、前例に訴える方法など、伝統的な誤謬論で研究されてきた手法を使う。また、事実を提示する際に使う統計や定義の説得的な使い方、結論を十分納得させるための方法が提示される。服、声、部屋、雰囲気といった非言語的道具も利用される。

次に「反論する」attacking an argument 際には、聴衆の反応を重視し、内的に自己矛盾していないか、客観的事実と不整合でないかどうか、結果や含意が偽でないかどうか、前提や理由が偽でないかどうか、前提から結論が帰結しないかどうか等が検討される。また先に挙げた方法への対抗手段も取られる。

「自論の擁護」defending your case においては、反論が自論を誤解しているという指摘をすること、より穏健な論を繰り返すこと、自分が言ったいくつかの事柄は正しいと言う事実を繰り返すこと等をあげる。また、他の選択肢をけなすこと、反対は証明できないことから自論の正しさを主張する手法などがあげられる。議論に勝てない最悪の場合は、負けを認めない、定義によって真にする、不一致を存在しないことにする等、引き分けに持ち込む方法が最後に述べられる。

本書のめざすところは、騙す技術を学ぶことによって、騙されなくなり、論理的にクリティカルに考えられるようになるということである。著者の工夫は、騙す立場に立つて能動的に学ぶことによって、技術をより効果的に学ぶことができるようにしたことにある。

確かに著者の説明は真に迫っており、騙す立場からの操作の技法を実感しながら学ぶことができるという点で、この本は非常に興味深く、読む価値のあるものである。しかし、問題もある。騙す技術の中には、他者への説得のために有効な手段もあり、実際の議論やディベート、プレゼンテーションの中で使われている技術もある。どこまでが、使ってよい技術でどこからが使うべきでないのかの基準がこの本の中では示されていない。また、騙す技術 *The Art of Deception* というタイトルも誤解を招きかねない。実際に騙す技術を身につけるためにこの本が使われるという危険性もある。ただし、そうした点に注意しておけば、この本はクリティカル・シンキングの入門書として、非形式論理や誤謬論を自習するのに非常に効果的な本と言えるだろう。

なお、著者の Nicholas Capaldi は、ヒューム研究者としても有名な哲学者である。また、著者みずからが、本の一部を朗読したカセットテープも市販されており、手軽に短時間でポイントを知ることができる。

(岩崎 豪人)

**Douglas N. Walton; *Informal Logic, A Handbook for Critical Argumentation*, Cambridge University Press, First edition, 1989, 292 pages.**

本書の題名は『非形式論理学』とあるが、扱っている対象は対話に限定されている。そしてさらにその対象は限られて、著者が「説得的対話(persuasion dialogue)」と呼ぶものにモデル化されている。説得的対話とは、ディベートと科学的探索の中間に位置するようなものである。前者が勝つことを目的とし、そのためには意図的に誤謬議論や個人攻撃も許されるのに対し、後者は客観的な知識の獲得が目的であり、勝敗が目的ではない。説得的対話は、必ずしも客観的な知識を基盤としないような宗教や政治などの実践的な領域のなかで、二つの陣営に分かれて相手を説得することが目的である点で科学的探索とは異なるが、不適切な(irrelevant)議論や誤謬を排して目的に達しようとする点で、たんに勝敗を目指すディベートとも異なっている。したがって実践的領域の対話における議論の不適切さや誤謬のチェックが本書の主な内容である。

本書では対話における議論において、相手を攻撃して勝つためにはどうすればよいかという積極的な手段を提供するというより、相手から攻撃されたときに、そこに不当な議論はないか、もしその場合はどうしたらよいかという、消極的・受動的だが議論に負けないための方法を扱うことが特徴的である。あるいはまた対話に不正がないか目を光らすレフェリーにも適切なハンドブックとして使用できると思われる。

対話における議論の不適切さや誤謬を説明するため、本書はこれらの分類から構成され

る。それぞれ各分類は例が挙げられ、実際の実践的領域における議論にそって説明される。本書の全体的な印象としては、これらの分類による厳密な一つの方法論の体系というより、お互いにゆるい関連をもつ方法の経験的な寄せ集めというほうがよいように思われる。

本書全体ではまず上述の説得的対話のモデルの説明と、そこにおける様々な誤謬 (informal fallacies) のタイプの列挙がなされ、不正に対するルール (negative rule) がしめされている。本書による不適切さや誤謬の例全ては、何らかの意味でこのルールに違反しているとして各章で参照される。

対話ではまず質疑と応答に焦点が当てられる。質問に対してどう答えればいいのかということが単に述べられるのではなく、むしろ問いの役割が注目される。問いの中には前提を含むものが存在し、返答に前もって強い制限を加えたり、議論をあらぬ方向へそらしたりするものがある。返答者は問いが議論の目的にそくしたものであるかをチェックして答えるということが重要になる。

そして次に質疑応答は、議論の目的に適切か (relevant) 不適切かということが問われる。対話において重要なことは議論の目的を定めるために適切な議題 (agenda) を定めることが重要になり、議題にしたがって、議論の適切さが測られる。不適切さは論理的な誤謬とはいえないが批判の対象となり、その例としては前章の攻撃的な問いや、適切な問いをはぐらかす返答などである。本書ではそれらは7つに分類されている。

本書ではその他に感情へのアピール、個人攻撃、権威への訴えなどの伝統的な誤謬が取り上げられ、その適切さを問題にしている。ここでは哲学において伝統的に誤謬とみなされていたものは、それ自体は悪いものではなく議論の目的に適切であるかが重要とされる。とくに個人攻撃の章は充実しており、実際に個人攻撃を受けたときの対応マニュアルやそのとき相手が不適切な議論ではないかをチェックする項目がある。

その他に演繹的な三段論法、帰納的議論に関する誤謬と不適切さの関係を扱っている。以上のように要旨だけを述べるとあじけないが、それは本書の魅力である様々な領域に渡る豊かな例を割愛したためである。本書はやや繰り返しが多いところもあるが、全体的に分かりやすく、普段の会話では議論することが少ないと思われる日本人にとっては、対話による議論の入門書として無理のないものと思われる

(三宅 岳史)

**Douglas N. Walton, *Plausible Argument in Everyday Conversation*, State University of New York Press, First edition, 1992, 320 pages.**

本書の著者はカナダのウィニペグ大学の哲学の教授である。彼は1989年にオランダでの

「議論に関する講演のための規則の違反としての誤謬」というプロジェクトに参加した。その際に彼は、議論に関する理論についての著名な研究者たちと一緒に仕事をする中で、議論とはなにかということについての理解に興味深い食い違いがあることに気づいた。ヨーロッパの研究者にとっては、議論というと、意見の対立を解決するために言葉を介した相互作用によって互いの不一致点を協力して建設的に解消することを指すと著者には思われた。一方北米の研究者は、論争(quarrel)や敵対的なやりとりなどのことを考えているように思われた。ヨーロッパの研究者にとって論争は議論とは異なるものである。違いは、言語や文化、個人などにあるのかもしれないが、著者はまず、議論という術語の意味をきちんと規定するべきであると考えた。

そこで著者は本書において、対話の様々な文脈において良くも悪くも用いられる道具としての議論の概念についての一般的な概観を与える。ここでは、論理学の中で伝統的に受け入れられてきたような基準とはまったく異なった基準の下で、正しいあるいは正しくないという評価されることが必要な日常会話の中での議論というものが問題とされる。論理学においては伝統的に議論は、演繹的や帰納的といった基準で評価される。しかし日常会話の中で議論が成功したとか正しいとか言われるには、演繹的に妥当であるとか帰納的に強力などということよりもむしろ、もっともらしい議論を通じて成し遂げようと考えられていたことが目論見通りに進むかということが重視される。

本書の表題ともなっている、この「もっともらしい議論」とは何なのか。これは、暫定的に議論を進めるような種類の推論(inference)に基礎を置くものであるが、しかしこのような議論は誤謬であるとして、これまで無視されたり非難されたりしてきた。本書はそのような偏見を打ち破って、もっともらしい議論というものが仮定的推論(presumptive inferences)に基づいていることを示すことから始められる。仮定的推論には、例外が付きものであるが、これは、「もし何かがFという特性を持っていたら、それはGという特性をも持っているということを、典型的には(例外はあるものの)、我々は期待できる」という取り消すことも可能な一般的前提(a defeasible general premise)に基礎を置いているからである。対照的に演繹的推論は、「全てのFはGである」という形の普遍的で一般的な前提に基礎を置いている。また帰納的推論は、Fという特性を持つもののうちの大半が、もしくは一定の割合が、またGという特性をも持つという意味での蓋然的あるいは統計的な一般的前提に基礎を置いている。つまり仮定的推論は、対話の文脈において用いられるある種実践的な推論として評価される。言い換えると、本書で提起される評価は語用論的なものであり、統語論や意味論におけるものとは全く違うのである。

本書では、「日常会話における推論と議論」においてこれまで誤謬と呼ばれていたこと

がらが挙げられ、議論とは何か、推論とは何かということ、そして議論をする際に推論を用いることが考察される。そしてもっともらしい議論に基づいている仮定的推論の「假定(presumption)」とは何か論じられる。次に「論争的対話(eristic dialogue)」において、日常的に行われる議論である論争的対話についての分析が行われる。ディベートと論争(quarrel)との違いや、集団同士の論争(organized group quarrel)、さらにはプロパガンダということにも話は及び、議論やディベートが論争になるということについても論じられる。そして伝統的に誤謬だとされてきたものが整理されそれぞれ分析が行われる。

また表題にもある通り、日常会話の中での議論が本書の主題であるので、議論や論争などの幾つものモデルが挙げられ、それぞれについての多くの興味深いケース・スタディがなされている。

(児玉 斗)

**Alec Fisher and Michael Scriven, *Critical Tinking —its definition and assessment—*, 1997, Edgepress(US), Centre For Research In Critical Thinking(UK), First edition, 236 pages.**

本書は「クリティカル・シンキング (CT)」の定義と CT 能力の評価方法に関する研究書である。著者たちは、それぞれイギリスとアメリカにおける影響力のある CT 教育の実践者であり、また共に著名な教科書の著者でもある(Fisher のテキストについては、文献紹介の Alec Fisher, *Critical Thinking — An Introduction* で紹介されている)。著者たちは、本書で CT とは何か(定義)そして CT の能力をいかに評価するかという問題について、先行する提案の功績と問題点の綿密な検討を基礎にして、新しい CT の定義とそこから導出される CT 教育における望ましい試験方法を自ら提案する。

「CT」をいかに定義するかということは、CT 教育の範囲と方法を再定義するうえで、CT 教育に対して重大な帰結を持つ。従来「CT」についてさまざまな定義が提案されたが、それらはそれぞれ示唆的ではあるが、簡潔でありすぎたり曖昧であったりして上述の役割を果たすには不十分であった。そこで、著者たちは以下の新しい定義を提案する。

- CT とは、「観察とコミュニケーション、情報と論証(argumentation)についての、訓練された(skilled)能動的な(active)、解釈と評価(evaluation)」である。

従来の定義と比較してこの定義は、「観察」という語を新たに導入し、また CT における評価的な側面と能動性を強調する点で特色がある(この定義の詳細な解説と評価については、本誌特集における研究論文『『クリティカル・シンキング』をどう定義するか』吉田, § 2 を参照)。

この新しい定義をよりどころにして、CT 能力の評価の問題が検討される。CT 能力の伝

統的な評価方法は、推論の妥当性や隠れた前提の発見、あるいは解釈の適切さや情報（ソース）の信頼性などを判定させる選択式(multiple-choice)テストが主であった。この評価方法は、採点が容易で信頼できるというメリットがあるが、誤答をすべて等しくカウントし、また正解の場合にもその度合いを計ることができないという意味で、浅いレベルの評価にとどまる。また受験者による解答の選択において出題者の背景的信念とは異なる信念が用いられた場合、受験者が「何を選んだか」からだけでは、彼が「どう考えたか」というCT技術を判断することができないというデメリットが除去できなかった。近年は、「より深く」をうたい文句に、ある議論を評価するエッセイを受験者に書かせてCTのエキスパートがそれを採点するという記述式のテストが流行している。こちらはまだ十分な実績が蓄積されたとは言えないが、採点には労力がかかる上、採点についてエキスパート同士のあいだにずれが生じた場合、その採点の信頼性と客観性は下がることになるという問題がある。

著者たちは、これに対して「評価選択式(multiple-rating)」と呼ぶ試験方法を提案する。これは、さまざまな解答の仕方を生徒に評価させるという試験である。例えば試験を受ける生徒は、CTのある課題に対する前年の生徒が残した解答の仕方——ある議論の要約など——をA～Dまでのグレードで評価づけする、そして生徒がどう評価したかということとをさらに教師が採点するというものである。これは、ただ習ったことを思い出して選択するという単純な作業ではなく、情報や論証の評価という側面をすでに含んでいるCTの作業をさらに評価するという仕方により高いオーダーの思考技術に焦点を当てるので、この意味で記述式と同様に深いCT能力をテストできる。さらに解答には選択式を採用しているため、採点の容易さと信頼性においては選択式テストに等しくすることができるというメリットがある。ただ、先に挙げた選択における背景的信念の必要性という問題に対しては、慎重な試験問題作成の手続きが提案されているものの、この形式のテストから原理的にこの問題が除去されたわけではないようである。

以上のようにこの本は、CTをただ受動的に議論を解釈する技術とする捉え方に対して、CTの新しい定義と評価方法を提唱し、知覚も含む認知活動全般についてその情報ソースにまでさかのぼって能動的に評価していこうとする高次の技術としてのCTにアプローチしようとする点で特色と価値を持つものである。

(吉田 寛)

**Trudy Govier, *Problems in Argument Analysis and Evaluation*, Studies of Argumentation in Pragmatics and Discourse Analysis (PDA); 5, Foris Publications - Dordrecht, 1987, 302 pages.**

本書は、議論の分析と評価に関して問題となる様々な論点に関して、著者の独自の観点から包括的に議論を展開した研究書である。本書の特徴のひとつは、著者の議論を体系的に展開する際に、批判や議論の対象となる具体的な様々な立場の論者による文献を引用も交えながら丹念に紹介し、そこから論点を汲み取る形で議論を行っている点にある。著者の基本的な立場は、第1章で述べられているように、Chaim Perelman の問題提起を継承するものである。つまり、実際の議論を研究するためには、形式論理学が扱う領域を超えたより広い観点が要求されるのであり、厳密さと確実性に関する形式主義的な理想に疑いの目を向け、議論の分析及び評価のためのより柔軟な基礎を確立するべきであるというのが著者の基本的な立場である。

内容は13の章と補遺から構成され、概ね基本的な問題から個別的な問題へと議論が展開されている。第2章は「議論に関する理論は可能か?」と題され、議論を研究するための理論的な立場の可能性に関する、最も基本的な問題が考察されている。まず、この問題に関する立場の一つとしてまず挙げられるのは、議論の理解や評価に関する基準を各学問分野に相対的であるとする John MaPeck の見解である。この立場は議論に関する一般的な理論の可能性を否定するものであるが、著者は多様な学問分野にわたって適用されるような議論に関する有意義な一般的規範が存在するという観点から、この立場の採りうる諸形態を検討し、最終的にこの見解を斥ける。次に、演繹主義と呼ばれる立場が挙げられる。この立場は、演繹的に妥当な議論を唯一の良い議論とするものである。著者によれば、この立場は徹底すれば、全ての演繹的に妥当でない議論を非合理的であるとし、ほとんど全ての議論を絶対的に価値のないものとする、受け入れがたい極端な懐疑的主張に至る。というのも、自然に生起するほとんどの議論が演繹的に妥当ではないからである。しかし、こうした立場とは別に、そうした自然に生じる議論を妥当なものに再構成することによって、大部分の議論を価値あるものと見なす再構成的な演繹主義の立場がある。この立場は元々の議論を省略三段論法であると見なしたり、言明されていない暗黙の前提が含まれているものと見なすことによって、適当な修正を施すことでそれらを妥当な議論に再構成しようとする。この再構成的な演繹主義に対して著者は、議論に関する理論にとっての経験的データである自然に生起する議論に対して、あまりにも過剰な改訂を課していると批判する。そのような観点から議論を扱う理由が必要であり、そうでなければ再構成の手続きはアドホックなものとなると著者は考える。最後に、前提と結論との間の連関の強さに関して程度の差が存在すると主張する見解が著者の主張に近いものとして挙げられる。この

見解によれば、議論の妥当性は演繹的妥当性に限定されず、前提が結論を支持する程度に応じて妥当性にも程度の差が認められる。しかし、この見解の具体的な主張には曖昧な点が多く、議論の現実的な理解のためにはより一層の展開が必要であると著者は主張する。

議論に関する理論の基本的な問題について以上のように検討した上で、著者はより良い理論を展開するために取り組む必要のある具体的な諸問題を以下の章で議論していく。そうした諸問題は、大きく二つに区別される。ひとつは、言説を解釈することに関係する原理や方針の問題で、それには、議論の同定の問題、議論の前提と結論の位置づけの問題、暗黙の前提や結論を与える問題、解釈の原理としての寛容の原理に関する問題などが含まれる。もうひとつは、議論に関する語用論(pragmatics)や弁証法(dialectics)の問題で、それには、良い議論の前提が真である必要があるのか、聞き手に受容可能であればいいのかという問題、権威や信頼可能性などの論者の個人的属性がその議論の評価に関係するかという問題、対立する議論などをどう扱うかという問題などが含まれる。

本書の中で考察される諸問題の興味深いものの一つに、寛容の原理について考察している議論がある。著者は、クワインやデイヴィッドソンが主張したと考えられる方法論的原理としての強い意味での寛容の原理は、我々が他の言語や文化及び他者の心を理解しようとする際には方法論的に危険であると主張する。特に、根本的翻訳や根本的解釈といった極端な文脈と、同一言語内の翻訳や解釈という文脈との間には実践的に有意義な大きな差異があるのであり、その二つの文脈を程度の差として扱い、性急に同類の議論を適用することは誤りであると著者は主張する。他の言説を有意味にするためには、極めて広範囲の一致が必要だとする議論に関する根本的な難点として著者が強調するのは、そうした寛容の原理が徹底されれば、他の言語や文化や他者の心の有する他者性が失われうるという点である。それはつまり我々は他者に自己のみを見出すような理解を求め、差異に出会うことから生じる理解を閉め出しかねなくなるという点である。個々の事例の文脈においては、こうした寛容の原理以外の諸々の考慮がより重視されうるという、実践的な観点からの洞察が、著者の主張の背景にはある。著者は、翻訳及び社会的・科学的理解に関する方法論的基準としての寛容の原理に関して、その主張の強さの様々な程度を区分し、強い意味での原理は否定しつつ、穏健な原理をグライスの議論を活用して明確にしようと試みる。穏健な寛容の原理は、論者の言説を、議論の目的と一致するような仕方で、換言すれば、議論的な意見交換に貢献するような仕方で解釈するように聞き手を導くものである。この穏健な原理はそれ自体が改訂可能なものであり、また、強い原理とは異なり、議論を論者の間での意見の不一致であると見なす観点が反映されている。

本書は議論に関するこうした諸問題について、詳細に議論を展開したものであり、そこ

で展開される著者の主張は、従来影響力を持った論理学や哲学に関する主張に対して根本的な問題提起を行うものが多い。それだけに、著者の主張の成否に関しては、本書の後にも議論がなされていると考えられる。しかし、議論の分析や評価に関して、どのような問題が考えられ、その問題についてこれまでいかなる主張がなされたのかを知る上でも、本書は有効な見取り図を与えてくれる。

(佐々木 崇)

**John Woods & Douglas Walton, *Argument: The logic of the Fallacies*, McGRAW-HILL RYERSON LIMITED, 1982, 273 pages.**

本書は非形式的誤謬の研究領域の成果を初歩的な形式論理学の領域と関連させて提示した教科書である。本書が成立する背景になっている問題意識は、次のように要約できる。すなわち、従来の非形式的論理学の教科書でなされたような、誤謬に関して、その例証となると思われる事例を提示するに留まる「標準的な扱い」は、不十分であり、より詳細に事例を検討すると、それらは全く誤謬でなかったり、正しい議論と誤謬とを区別する指針に欠けたりするという問題点が明らかになる。それゆえ、そうした「標準的な扱い」に代わる、誤謬に関するより明確で理論的な指針を形成することが必要となる。以上のような問題意識を背景にして、本書は様々な誤謬を含む議論に関する最も適切なモデルは何であるかを探求するという観点から、複数のモデルを提示し、そのモデルと関連する誤謬を検討し、それぞれのモデルの有する利点と限界を指摘した上で、最も理想的なモデルを提案するという構成になっている。

第1章では、論争（quarrel）のモデルが提示される。このモデルと関連する誤謬が示された上で、問題点として、誤謬を取り扱う指針となるのに必要な規則性に欠けることが指摘され、議論のモデルとしては不的確であるとされる。次に、第2章では、ディベートのモデルが提示される。このモデルの問題点は、ディベートの究極の目的が対立する論者を負かすことであり、論争の場合と同様に、誤謬議論を公正かつ客観的に評価するには、その主観的な要素が不適切であるという点である。こうした欠点を指摘した上で、第3章では、古典論理学と呼ばれる、通常の命題論理学の基礎が提示される。古典論理学のモデルが先の二つのモデルには欠けている正確さと明晰さを有することは認められるが、命題間の関連性に関する問題が見逃されていると指摘される。このために古典論理学には、関連性の誤謬を考慮に入れることができないという限界があり、この誤謬が重要である以上、このモデルは拡張されねばならないと主張される。第4章では帰納論理学のモデルが提示され、帰納や蓋然性や統計に関わる誤謬が検討される。第5章では、権威や専門家に訴え

る議論としてのもっともらしい議論(plausible argument)のモデルが提示され、それと関連する権威に訴える誤謬が検討される。こうした議論は、演繹的でも帰納的でもなく、主観的な訴えを本質的に含むようなより弱いタイプの議論であり、このモデルは、我々が矛盾に直面したような事例を扱うことができる利点を有するとされる。

第6章では、以上のような複数の議論に関するモデルの検討から、議論に関する共通の把握が可能であるかという問題を考え、アリストテレスの理解に基づいた、議論の対話的モデル(dialectical model)が提示される。このモデルは議論を、複数の人間の間での、一連の問いと答えによる、規則的な相互の意見交換として捉える。問題点としては、古典論理学のような確実性がないように見えることが挙げられるが、このモデルは先の全てのモデルに組み込むことができるとされ、また、誤謬に対して他のモデルよりも広い適用可能性を有するという利点が強調される。

以下の章では、循環議論の誤謬に関するミルの議論の考察、誤謬に関する理論の具体的な適用、量化理論、様相論理学や認識論理学による古典論理の拡張が論じられる。二つの補遺は具体的な事例に則した誤謬の問題の検討を扱い、また、最後には、それぞれの問題領域に応じた簡単な文献紹介がなされている。

本書は、従来は不十分な分析に留まっていた誤謬に関して、誤謬を含む議論が正しいのか正しくないのかを規則的に評価するための、正確で明晰な一般的な指針を確立するという問題意識のもとで、様々な誤謬に関する研究の成果を具体的に提示しつつ、そこから引き出される古典論理学に対する問題点にも言及すると同時に、命題論理学や帰納論理学、また古典論理の拡張という形で量化の理論や様相論理などの基本的な事柄に関して順を追って理解できるように、論理学の教科書としての側面も考慮に入れられたバランスの取れた構成となっている。

(佐々木 崇)

**Ralph H. Johnson**, "Logic naturalised: recovering a tradition", in *Argumentation: across the lines of discipline, proceedings of the conference on argumentation 1986*, **Frans H. van Eemeren, Rob Grootendorst, J. Anthony Blair, Charles A. Willard eds**, Foris Publications, 1987, ch. 3, pp.47-66

本論文で著者が批判するのは、形式的・演繹的論理(Formal, Deductive Logic: FDL)の伝統である。まず、議論(argument)に関する著者自身の特徴付けがなされ、その観点から、議論及び論理学に関する FDL の捉え方が批判される。次に、古典的な論理学の教科書や、非形式的論理学の流れに属す教科書の記述の検討を通じて、そうした FDL の捉え方がど

れだけ影響を与えているかを確認し、将来の論理学のあるべき方向性が述べられる。

著者による議論の特徴付けは、次のように要約できる。議論とは、論争・懐疑の余地がある事柄に関するものであり、対立する見解の存在が必ず前提される。そして、議論の一つの目的は、証拠と推理のみを用いて結論が真であることを理性的な他者に説得することであり、それゆえ議論は、単に結論への道筋を示すのではなく、その道筋が優れていることを示すことで、論争相手に対話的に納得させねばならない。これに対し FDL は、議論と推論とを同一視し、論理学の研究対象を演繹論理に限定する。しかし著者によれば、議論は推論ではなく、論理学の研究対象は、アリストテレスによって切り開かれ、パースやデューイが取り組んだような、より広範囲なものであるべきであるとされる。

こうした FDL の捉え方に関して、著者はフレーゲにその端緒を見て取る。しかし本論文では、そうした捉え方が生じた理由ではなく、その捉え方が論理学の教科書に与えた影響が検討される。新旧の様々な立場の教科書(Quine, Max Black, Beardsley, Copi, Howard Kahane, Stephen Tomas, Johnson & Blair)が検討され、著者が批判する論点に関して FDL の影響がいかに大きいかが示される。そして、著者の立場に近い文献(Scriven, van Emeren & Grootendorst)が挙げられた上で、著者が特徴付けた方向で議論を捉え直し、レトリックやコミュニケーション理論の知見も取り入れて、論理学を科学（特に数学）ではなく人文学の中に位置づける必要性が強調される。論理学が自然化されねばならないという主張は、二つの側面から述べられる。第一に、論理学は可能な限り人工言語ではなく自然言語に取り組むべきであるとされる。第二に、論理学は推理能力を向上させることを目的とすべきであり、それは論理学の学習者が自然に期待することであるとされる。この意味での論理学の自然化が、論理学の向かうべき展望であると主張される。

(佐々木 崇)

**Trudy Govier, "Beyond induction and deduction", in *Argumentation: across the lines of discipline, proceedings of the conference on argumentation 1986*, Frans H. van Emeren, Rob Grootendorst, J. Anthony Blair, Charles A. Willard eds, Foris Publications, 1987, ch. 4, pp.57-64**

本論では、帰納と演繹という、従来の推論における二つの方法を批判し、それ以外の推論方法が模索される。その例として挙げられるのは、「その場その場の推論 (case-by-case reasoning)」と「コンダクティヴな推論 (conductive reasoning)」が挙げられる。

まず前者の方法は、x という場合と y という場合のある点における類似性を理由として、他の点における類似性もまた存在すると想定するものであり、類推による議論の一種である。この推論方法は法学や道徳思想、その他論理や哲学の分野でさえ多く使用されている。

次に後者の方法は、(多くの場合)複数個の前提によって、結論を支持しようとするものである。この場合の諸前提と結論の関連性は概念的・規範的なものであり、演繹論理ほど強力ではなく、結論を絶対的な意味で必然的に帰結せしめるものではないが、それでも結論の蓋然性を高めるものと言える。

以上の二つの方法は、演繹に比べて厳密な方法ではないと言われるかも知れない。それでも、理論が完全なものとなり、一般的な事柄から機械的に個別的な事柄を導き出すことが出来るような状態に至ることは不可能であると思われる。してみれば、我々は厳密で狭い意味での演繹的方法以外の方法をも必要としていると言わざるを得ない。そうした中で、上に挙げられた方法は極めて有用であるというのが、筆者の主張である。

(枝村 祥平)

**Douglas N. Walton, "What is a fallacy?", in *Argumentation : across the lines of discipline, proceedings of the conference on argumentation 1986*, Frans H. van Eemeren, Rob Grootendorst, J. Anthony Blair, Charles A. Willard eds, Foris Publications, 1987, ch.29, pp.323-330**

本論文の主題は、題名の通り、「誤謬」と言う語の意味に関する考察である。まず、代表的な説明として、「誤謬議論とは、妥当であるように見えるが、妥当ではないような議論である」というアリストテレスにまで遡る説明が挙げられる。しかし、誤謬に関してはこれ以外にも様々な説明がなされており、次に著者はそうした説明の幾つかを検討する。哲学事典や論理学の教科書の中でなされる「誤謬」の説明・定義が検討された上で、次のようにそれらの共通点が要約される。形式的誤謬として、誤謬議論は妥当・健全でないものか、正しくないものとして説明され、そうした議論に加えて、非形式的誤謬として、レトリカル・心理学的な要請から説明される誤謬にも言及される。そして著者は、こうした誤謬の説明の問題点として3つの論点を挙げる。まず、妥当性、及び正しさという概念の問題。次に、レトリカル・心理学的な要請の内容の問題。そして、形式的・非形式的の区別の基準の問題である。

このように著者はこれまでの誤謬の定義が有する問題点を挙げた上で、個々の具体的な誤謬に関する研究から、様々な論点を取り上げ、新しい定義を提案する。著者によれば、真の問題は、個々の事例において、あるタイプの議論が理にかなうものか誤謬であるかの判断を可能にする指針を作ることである。そして、その際に重要な点は、個々の事例の対話の文脈を重視することであり、その点を無視してある議論のタイプ全体を誤謬もしくは正しいものとして扱うのは表面的であるとする。こうした観点から、「議論」や「批判」といった概念の捉え直しも言及された上で、「誤謬」についての次のような定義が提案さ

れる。すなわち、誤謬とは、強い意味での反駁が正当化可能な仕方では判断されうるまでは批判に対して開かれているようなある議論における、理にかなった手続きに関する、あるタイプの弱さ、欠点、違反である。また、(個々の) 誤謬議論とは、個々の事例の中で与えられる情報と関連して、議論の理にかなった指針に訴えることによって、当の議論は誤謬に参加していることを批判が示しうるような議論である。以上の定義が従来のものより優れているならば、非形式的誤謬と言われてきた事柄に関する研究は、より広く実践的議論の研究として見なされるべきだと著者は主張する。

(佐々木 崇)